

		[27]
氏 名	平野	ひらの ともこ 智子
博士の専攻分野の名称	博士	(心理学)
学 位 記 番 号	心博第 36 号	
学 位 授 与 の 日 付	2020 年 3 月 31 日	
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当	
学 位 論 文 題 目	対人援助職のためのフォーカシングに関する研究	
論 文 審 査 委 員	主 査 教 授 池見 陽	
	副 査 教 授 串崎 真志	
	副 査 教 授 吉良 安之 (九州大学)	

## 論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、問題と目的及びその基盤を提示する「第Ⅰ部（第 1 章、第 2 章、第 3 章）」、フォーカシングの応用である「セラピスト・フォーカシング」の対象者を対人援助職に広げ、その実践の検討を主とする「第Ⅱ部（第 4 章、第 5 章、第 6 章、第 7 章、第 8 章）」、セラピスト・フォーカシングにおける理解のあり方についての理論的探索を主とする第Ⅲ部（第 9 章、第 10 章）、これらの議論を統括する総合的考察「第Ⅳ部（11 章～12 章）」の 4 つから構成されている。

セラピスト・フォーカシングとは、心理療法家（セラピスト）が心理療法面接場面で生じた体験を吟味するために、Gendlin（1981/2007）が提唱したフォーカシングを用いる方法である。

第Ⅰ部（第 1 章、第 2 章、第 3 章）では、セラピスト・フォーカシングの対人援助職への応用にあたり、先行研究をレビューし、本研究の基盤となる概念提示及びセラピスト・フォーカシングを概説した。

第Ⅱ部（第 4 章、第 5 章、第 6 章、第 7 章、第 8 章）ではセラピスト・フォーカシングの対人援助職への応用実践を検討した。それらは、第 4 章学生ボランティア、第 5 章産業保健師、第 6 章リマインダーという工夫の応用について、第 7 章フォーカシングに馴染みがない対人援助職のためのマニュアル作成、第 8 章大学院を修了したばかりの心理臨床家などである。

第Ⅲ部（第 9～10 章）では、セラピストが自身の体験を吟味するとき、どのようにクライエントへの理解が生じると考えられるのか、そしてセラピスト・フォーカシング・セッションの場ではどのようなことが起きているのかについての理論的探索を行った。セラピスト・フォーカシング・セッションの逐語記録を用いて、ジェンドリンの体験過程理論、

そして心理療法に関連するジェンドリン哲学の部分を詳細に記述した Ikemi (2017) を援用して検討した。とくに、「追体験」と「交差」がどのようにセラピスト・フォーカシングの実践において観察されるかを、事例を通して論じた。

第 IV 部は本論の総括及び今後の課題と展望を整理したものである。

## 論文審査結果の要旨

セラピスト・フォーカシングの考案者、及び「追体験と交差」理論の考案者らが審査委員に含まれており、セラピスト・フォーカシングの実践やその理論的背景について正確に理解していることを確認した。また、本論はこれまでセラピストの援助方法だったセラピスト・フォーカシングを「対人援助職」に拡大しているところがオリジナルな点の一つである。心理療法家に対して用いる場合ともっと広く対人援助職に対して応用した場合の相違点や留意点などについて適切に検討されていた。また、このようなセラピスト・フォーカシングが作用する理論についても十分に検討されている点が特徴的であった。以下では、本研究科が定める「博士論文審査基準（課程博士）」にしたがって、審査委員の見解を記述する。

### (1) 問題意識が明確で、課題設定が適切であること

論文提出者は学部の卒業論文のころからセラピスト・フォーカシングを対人援助職に用いる実践及びその研究に取り組んでおり、問題意識は明確である。また、第 II 部で対人援助職に対する実践を論じたあと、第 III 部でそれらの実践を理解するための理論的考察がなされており、課題設定は適切である。

### (2) 国内外の先行研究を適切に検討、吟味していること

本論の先行研究に関する論述は国内外の本課題に関する研究のほとんどすべてに及ぶものであり、それらを適切に検討・吟味している。セラピスト・フォーカシングは日本で開発されたために、海外の先行研究は本法の考案者である副査や本論文提出者によるものに限られているが、本論は本法に近いものを扱った海外文献をも検討している。

### (3) 研究目的に照らして研究・分析の方法が適切であること

本論はセラピストや対人援助職がどのようにフォーカシングを通してクライアント理解、あるいはケース理解が促進していくのかを論じたものであるため、事例研究が用いられている。また一部では逐語記録が検討されている。実際にセラピストや対人援助職をインタビューし、そこで得られた体験記述から考察が導かれており、本研究には適切な研究法で

ある。

(4) 論文構成が的確で、論理展開に整合性、一貫性、説得性があること

第 I 部で基礎的な概念やメソッドを提示し、第 II 部でそれを応用した実践を報告し、第 III 部でそのような実践の中で何が起きているのかを理論的に検討しており、このような論文構成は的確である。また、理論には一貫性があり、整合系、説得性がある。

(5) 全体を通して社会的・学術的な独創性が認められること

日本では対人援助職のバーンアウトやストレスは大きな社会問題となっている。このような事態への対応の一つを提案するのが本論の意義である。また、セラピスト・フォーカシングを心理臨床家以外に対して実践すること、加えて、その実践を理論的に検討することは他の研究者は行っていないため、この研究には独創性がある。

(6) 国内外の学会や社会に対して貢献が認められること

初出一覧にあるように、論文提出者は本論を構成する部分を国内では日本心身医学会の学会紙に発表している。また、日本人間性心理学で口頭発表している。海外では World Conference on Focusing-Oriented Psychotherapies や Focusing International Conference で口頭発表し、学会紙 *Person-Centered & Experiential Psychotherapies* で論文を発表している。このように、学会や社会に対して貢献している。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。